極彩色の壁画古墳と渡来人の郷、檜隈路を巡る

４月２７日の「古都・飛鳥散歩」に１２人が参加

国営飛鳥歴史公園主催「 古都・飛鳥散歩～極彩色の壁画古墳と渡来人の郷、檜隈路を巡る～」が４月27 日（日）開かれ、お客様 12 人が参加、歴史サークル員６人がガイドをしました。初夏を思わせるような爽やかな風に吹かれながら、新緑の美しい檜隈路を巡りました。

明日香村西南部一帯が古来、「檜隈（ひのくま）」といわれてきました。「檜隈」には、多くの分野で大和王権を支えた渡来系氏族が活躍した痕跡が残っています。

最初に訪れたのは、平田地区の「高松塚古墳」です。わが国で初めて発見された極彩色の壁画古墳です。当日は、発見に至った経緯、被葬者は？　などについての解説を行い、参加者は熱心に耳を傾けていました。そのあと、壁画館内に入り、東西の壁に描かれた１６人の男女群像、天井の星宿図、日像・月像のきらびやかさ、発見時のリアルな石槨のレプリカに目を見張っていました。

次に、栗原地区の田園の中を歩き、呉原(栗原)寺跡・竹林寺・呉津彦（くれつひこ）神社をたずねました。呉原寺跡の出土瓦から創建は７世紀後半。「呉原」は雄略朝に呉人が入植したことに由来し、東漢氏（やまとのあやうじ）の坂上氏が創建に関わっていたとされています。当日は、金堂の基壇跡、堂塔が建てられていたとみられる礎石などが説明されました。一行は、栗原地区の集落に入り、竹林寺の境内に残っている呉原寺の礎石を見学。そして南隣の呉津彦神社をたずねました。栗原に居住した呉人たちの祖神・呉津彦神を祀った神社であろうと紹介されました。

次のキトラ古墳は、高松塚古墳と同時期に築造された終末期古墳で、ファイバースコープ等による調査で、四方の壁に四神、天井に天文図、内部探査で各壁面に獣頭人身十二支像が画かれていることがわかりました。参加者は「四神の館」展示室を見学し、「現存する本格的な天文図」に驚き、キトラ古墳の素晴らしさを改めて感じていました。

檜隈寺跡(国史跡)は明日香村檜前地区にある 7 世紀創建の寺院跡。渡来人が多数居住したといわれる地域にあります。参加者は、渡来系特有の瓦積み基壇方式で築造された講堂跡や、金堂跡、十三重石塔等を見学しました。和歌山県からの一人は「四神などの壁画を見たくて、毎年公開日に明日香村を訪れています。今回は高松塚・キトラ古墳に加えて、渡来系氏族ゆかりの古代寺院跡などを見ることができてよかったです」と話していました。

「檜隈」をテーマにしたイベントを中心的に企画・ガイドをした歴史サークル 14 期の松本義夫さんからのメッセージ：「渡来人の里といわれている檜隈路は飛鳥時代は広い範囲をさしますが、中心といえば呉原寺跡や檜隈寺跡があった今の檜前付近となります。渡来人の足跡に思いを巡らし説明をしたところ、お客様も同じ思いを持たれたようです。今、田畑が広がる呉原寺跡には何らそれらしき遺構は存在しません。ただ、たくさん出土した瓦や礎石だけで当時の様子が想像できます。また、僧 道昭が火葬されて散骨された場所といえば呉原寺で、日本の火葬の起源を知ってもらえたと思います。４～７世紀にはたくさんの人が渡来してきました。８～９割が渡来人といわれています。我が国に様々な技術を伝えました。渡来人が招き入れたのが蘇我氏といわれており、渡来人は蘇我氏によって大和王権に仕えて栄えていきました。それから蘇我氏は力を伸ばし大和王権の中心が飛鳥に置かれたことを知ってもらえました。

檜隈寺は渡来人の倭漢の氏寺といわれています。伽藍配置からは渡来人の姿が目に浮かびます。飛鳥時代の歴史は文献から知ることができるが、現地に立つことにより当時の様子がありありと想像できます。明日香村には渡来人が描いたといわれている極彩色壁画古墳の高松塚古墳とキトラ古墳があります。

それらから中国や朝鮮半島の何千年も昔の思想を知ることができます。普段に何気なく使われている文化が壁画から知ってもらえたことと思います。明日香村には古来の不思議なことがたくさんあります。飛鳥のロマンを感じられて、また飛鳥へ来られることを楽しみにしています」

（写真提供：２０期北、写真と文：２７期佐藤）

＊トップページの写真は「栗原の野仏」です。

〈飛鳥里山クラブ歴史ガイドによる説明の様子を写真で紹介します。〉

高松塚古墳

呉原（栗原）寺跡

呉津彦神社

キトラ古墳

キトラ古墳「四神の館」

檜隈寺跡